



Title	Identification and characterization of hepatocyte-specific regulatory regions of the rat pyruvate kinase L gene : the synergistic effects of multiple elements.
Author(s)	山田, 一哉
Citation	大阪大学, 1993, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3065796
rights	© the American Society for Biochemistry and Molecular Biology
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	やま だ かず や 山 田 一 哉
博士の専攻分野の名称	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	第 1 0 6 2 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 5 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 医学研究科生理系専攻
学 位 論 文 名	Identification and characterization of hepatocyte-specific regulatory regions of the rat pyruvate kinase L gene: the synergistic effects of multiple elements. (ラットピルビン酸キナーゼ L 遺伝子の肝細胞特異的発現調節領域の同定と特性：複数の因子の相乗効果について)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 田中 武彦 (副査) 教 授 吉川 寛 教 授 平野 俊夫

論 文 内 容 の 要 旨

(目 的)

ラットピルビン酸キナーゼ (PK) L 遺伝子は、R 型および L 型の 2 つの PK アイソザイムをコードしている。本遺伝子は、12 個のエクソンから構成されており、第 1 エクソンは R 型に、第 2 エクソンは L 型に特異的エクソンであり、他は両者に共通のエクソンである。従って、PKL 遺伝子は、組織特異的なプロモーターの使用により、赤血球では R 型、肝臓では L 型 PK アイソザイム mRNA を転写すると考えられる。本研究では、このうち肝特異的遺伝子発現に必須のシスエレメントの同定とそれに結合する因子についての検討を行った。

(方法ならびに成績)

(1) L 型 PK の転写開始点上流 -3200bp から欠失させた DNA 断片を大腸菌のクロラムフェニコールアセチルトランスフェラーゼ (CAT) 遺伝子の 5' 上流に組み込んだプラスミドを初代培養肝細胞や HeLa 細胞、K562 細胞にトランスフェクションし、CAT 活性を測定した。

初代培養肝細胞にエレクトロポレーション法でトランスフェクションしたところ、L 遺伝子の 5' 上流 -3200 から -279bp までをのぞいたプラスミドでは CAT の発現にほとんど差は認められなかったが、-185bp までデリーションを行なったプラスミドでは CAT の発現はわずかに増大が認められた。さらに、-152、-94bp までデリーションを行なったプラスミドでは、暫時 CAT の活性低下がみられ、-62bp では CAT 活性はみられなかった。一方、これらのすべてのプラスミドは、HeLa 細胞や K562 細胞では CAT 活性はみられなかった。

さらに、-94 から -62bp までの領域を詳細に調べるために -74bp までデリーションしたプラスミドをトランスフェクションしたところ CAT 活性はみられなかった。そこで、-94 から -76bp に相当する合成ヌクレオチドを -62bp の 5' 上流に挿入したところ CAT 活性がみられた。この領域を L-I と名づけた。次に、-185 から -95bp の領域を詳細に調べるために、3' 端を -95bp に固定し、5' 端を -185、-170、-155bp までデリーションした断片を -94bp から下流を含むプラスミドに挿入した場合、-170bp までは同程度の活性であったが、-155bp では活性が低下した。また、5' 端を -170bp に固定し、3' 端を -95、-126、-139bp までデリーションした断片を挿入した場合、-126bp までは同程度の活性であったが、-139bp では活性が低下した。従って、-170 から -126bp までの領域が活性をもつことが明らかになった。この領域には、LF-A1 と MLTF の結合配列がみられたため、-126 から -149bp を L-II、-150 から -170bp を L-III と名づけ、各々の合成ヌクレオチドを合成した。

これらの3つの合成ヌクレオチドを単独で、あるいは様々な組み合わせで、方向も変えて-62bpより下流を含むプラスミドに挿入して肝細胞にトランスフェクションした。その結果、L-Iは単独で方向に無関係に活性をもった。L-IIはL-Iに、L-IIIはL-IIに依存して互いに相乗的に作用した。これらの3つのエレメントはこの順序で、おなじ向きに存在するときに最大活性を示した。また、これら3つの領域を含むDNA断片をSV40のプロモーターの上流や下流に逆向きに挿入したプラスミドを肝細胞にトランスフェクションしたところ、それぞれCAT活性を上昇させた。また、肝細胞では発現しないPKM遺伝子上流に逆向きに挿入した場合でもCATの発現がみられた。

(2) これらの3つのエレメントに結合する因子を同定することを試みた。L-IにはLF-B1、L-IIにはLF-A1、L-IIIにはMLTFの結合コンセンサス配列がみられたので、それぞれについてゲルシフト法を用いて検討した。L-Iは、LF-B1を大腸菌に発現させた抽出物との間で結合がみられた。また、その結合力は、アルブミンのLF-B1結合配列よりも弱かった。L-IIは、肝核抽出物中に結合因子がみられたが、それはLF-A1とは異なっていた。L-IIIも同様に、肝核抽出物中に結合因子がみられたが、それはMLTFとは異なっていた。

(総括)

(1) ラットPKL遺伝子の肝細胞特異的遺伝子には、L型PKの転写開始点上流-76から-94bp (L-I)、-126から-149bp (L-II) および-150から-170bp (L-III) の3つのシスエレメントが必要であった。L-Iは単独でエンハンサー様活性を示したが、L-IIやL-IIIは単独では不活性であった。L-IIはL-Iに、L-IIIはL-IIに依存して互いに相乗的に作用した。これらの3つのエレメントはこの順序で、おなじ向きに存在するときに最大活性を示したことから、1つのユニットを構成していると考えられた。このユニットは、ヘテロなプロモーターとも、位置や方向に関係なく作用することから、組織特異的エンハンサーであることが明らかになった。

(2) L-IにはLF-B1が結合し、他の2つには未知の転写因子が結合することが示された。

論文審査の結果の要旨

本研究は、ピルビン酸キナーゼL遺伝子の肝細胞特異的な遺伝子発現制御領域を解析し、それらに結合するタンパク質について検討したものである。その結果、L遺伝子の転写開始点上流-189bp内のL-I、L-II、L-IIIという3つの制御領域が、1つのエンハンサーユニットとして肝細胞特異的遺伝子発現に寄与していることを示している。また、L-Iには転写因子のLF-B1が、L-IIやL-IIIには未知のタンパク質が作用することも明らかにしている。

これらの結果は、肝細胞の分化機構、L遺伝子の細胞特異的遺伝子発現にかかわる転写因子間の相互作用機構、ならびにホルモンや高炭水化物食による転写促進機構の解明に役立つと考えられ、学位に価するものと認める。